■令和４年度 企画展２関連講演会（第２回）

新津の山に大きな遺跡と古墳があった！
－歴史を変えた古津八幡山遺跡－

坂井秀弥（新潟市歴史博物館館長・奈良大学名誉教授）

目次

はじめに
１．遺跡発掘と戦後日本の考古学
２．新潟にもあった古墳とその前史
３．古津八幡山遺跡の発見
４．保存の声と確認調査の継続
５．さいごに－遺跡の意義

はじめに

ただいまご紹介いただきました、新潟市歴史博物館、通称みなとぴあの坂井と申します。よろしくお願いいたします。

（スライド１）今日は、「新津の山に大きな遺跡と古墳があった」というテーマでお話しさせていただければと思います。

この写真は古津八幡山遺跡（註）の史跡整備が終わったあとで撮影していると思いますが、非常にきれいでよくできています。これが遺跡のある丘の上で、ここに直径 55 mくらいの、新潟県で最大の古津八幡山古墳があります。

それからこちらに、ちょっとポツポツ見えるのが、竪穴住居を復元したところになります。ここにちょっと土手みたいなのが見えますが、これは集落、ムラを囲っている空堀で、環濠と言います。私はこの写真、すごくいい写真だなと思います。向こうを見ると角田山、弥彦山と手前に広い蒲原平野が見えます。秋の稲刈りが終わったあとでしょうか。恐らくこの辺、日本海の向こうに佐渡が見えるはずです。

手前のここに当時運動公園とか、呼んでいた公園計画がありました。ここが今の新津美術館で、こちら側が県の植物園になります。1987 年、私がまだ県の文化行政課の職員のころに、そもそも磐越自動車道という高速道路の計画があがりました。越後平野は低い土地ですから、高速道路は盛り土をして道路面を高くしてつくります。その土砂の確保が必要だということで、ここの山一帯から土を取って高速道路をつくるという計画で、その後公園にするというものでした。そのため私は、この計画地に遺跡があるかどうかの調査を現地で行うことになりました。私が現地に来たのは１週間だけでしたが、まったく存在がわからなかった大変貴重な古墳や遺跡があることがわかりまして、いろいろな問題があり、紆余曲折もありました。しかし、1990 年に遺跡を保存することが決まり、それから 15 年経った 2005 年、平成 17 年に国の史跡に指定されました。

国の史跡というのは、現在全国で 1,900 カ所くらいあります。新潟県では 35 件くらいでして。学術的な価値が高くて、国としてもきちんと残していくことを決めた遺跡です。国史跡は、発掘調査や史跡公園の整備事業に、国が補助金を出すことになっていて、それだけ大変重要な遺跡です。

（スライド２）この新津美術館はなかなかきれいな建物で、私は好きです。その隣にあるのが県立植物園です。そしてこの美術館の奥のほうにあるのが、新潟県の埋蔵文化財センター、遺跡のことを取り扱っている施設になります。ここにも書いてありますけれども、1987 年 10 月、私はこの地

に初めて立ちました。それは遺跡があるかないかを確認するための調査に来たものです。思いもよらず見つかったのが、県内最大の大きな古墳と、山の上にある、特殊な弥生の高地性集落でした。新潟県でこんなものが見つかると私も思っていませんでしたので、大騒ぎになりました。しかし、多くの方々の理解や協力が得られまして、特に、旧新津市の地元の方々、それから県をあげて保存運動が起こりまして、遺跡は保存され、先ほど申し上げたように2005年に国の史跡に指定されました。

今は、先ほど写真で見てもらったように大変きれいな遺跡公園になっています。それから周辺に、このような美術館や植物園があって、歴史、文化と自然豊かなゾーンとして多くの市民の方々に親しまれています。35年前、よもやこのように多くの方々に親しまれる場所になるとは、私はまったく想像できなかったところです。

私は27年間新潟を離れていましたけれども、３年前新潟に戻ってまいりまして、それからこの新津美術館にも来るようになりました。去年の12月、黒井健さんの展示があったときに見に来ました。この美術館は入口から入った正面がきれいですよね。白い大理石の大きな階段があります。その奥にカフェがありますが、そこでコーヒーを飲みながら、向こうの山を眺めて、「35年前は大変だったな、でも今はこんなふうに素敵な美術館もできて、市民に親しまれる場になってよかった」、とつくづく思ったところです。

今日は、遺跡の発見に立ち会った者として、当時を振り返って、遺跡の意義を考えたいと思います。私としては35年前いろんな方にお世話になりましたが、その関係者の方々に感謝を申し上げたいという思いです。

これからの話は大きく５つに分かれていまして、「遺跡発掘と戦後日本の考古学」、それから２つ目が、「新潟にもあった古墳とその前史」、３つ目が「古津八幡山遺跡の発見」、４つ目が「保存の声と確認調査の継続」、そして５つ目が「さいごに」ということで「遺跡の意義」ということでまとめてみたいと思います。

１．遺跡発掘と戦後日本の考古学

発掘調査と歴史の解明

（スライド３）まず、「遺跡発掘と戦後日本の考古学」です。日本は戦後、特にこの半世紀、もう本当に日本列島各地で発掘調査をしてきました。ちょうど去年で発見50年になった高松塚古墳の壁画が見つかって、日本に考古学ブームがやってきました。そのあと、全国的に大規模な開発事業にともなってかなり発掘調査が行われ、その過程でさまざまな遺跡が見つかりました。九州の佐賀県では、吉野ケ里遺跡という弥生時代の遺跡が見つかって、弥生時代のクニといっているものの全貌がわかりまして、工業団地の建設はやめになって保存されました。

それから数年後、今度は東北、青森県で、県の運動公園の建設工事前に発掘調査をしましたら、三内丸山遺跡という、縄文時代のすごい遺跡が見つかりました。縄文時代は弥生時代の前の時代で、稲作をやってない、日本人のイメージとしては、貧しい文化のようなことを考えていたのが、まったくそうではない。人口も多かった。そんなことがわかりまして、青森県は事業をやめて遺跡を保存しました。これが２年前に世界遺産に登録されたということになります。

（スライド４）各地で遺跡の発掘調査が進められる中で、歴史が明らかになっていきました。４年前に大阪の百舌鳥・古市古墳群が世界遺産になり、それから今申し上

げたように、東北と北海道の縄文の遺跡が、世界遺産に登録されました。このような遺跡が世界遺産になるなんてことはまったく思ってもいませんでした。多くの遺跡が発掘されて、考古学の研究も進んで、世界遺産の登録に至るということは、戦後日本各地で一生懸命発掘調査を続けてきた成果が実ったということではないかと、私は思います。

（スライド５）この東北・北海道の縄文遺跡の世界遺産は、17 の遺跡が登録されていますが、そのうちの半分くらいが、工事前に発掘調査をした結果、すごい遺跡だということがわかって、工事を取りやめて保存した遺跡です。写真にあるように地元の市民の方々が、縄文の遺跡を見直して地域づくりにつなげていることも大変注目されます。

（スライド６）こうした戦後日本の遺跡の発掘調査が数多く実施されたことは、文化財の保護制度と実は密接にかかわっています。今の文化財保護法は、土木工事で遺跡が影響を受けるときは、事前に発掘調査を行うという規則になっています。ですから、年間全国で 8,000 件くらいの発掘調査が行われています。発掘調査は誰がやっているかというと、おもに大学の先生がやっているわけではなくて、都道府県・市町村の行政が発掘調査をしています。ですから、全国の都道府県・市町村には、考古学・文化財の担当者が 5,500 人くらいいて、発掘調査や考古学の調査研究を行っています。

こうした発掘調査は土木工事に伴う調査ですから、必ずしも学術的な目的でやっているわけではありません。ある考古学的な問題の解明のために発掘するわけではなく、ここの遺跡が工事で壊れるからとりあえず発掘調査をしておくという考え方です。ただし、学術的な手続きを踏んでやっていますから、きちんとした調査をやります。その結果、確かに地域的な粗密の差、たくさん調査している所とそうでない所の差はありますが、全国各地で悉皆的な発掘調査を続けてきました。その結果、各地域と国の成り立ちが本当にここまでわかってきたなと、私はこの半世紀を振り返って思っています。新潟県もその例外ではないわけです。このような発掘調査の仕組みができた、その出発点は昭和 20 年の敗戦にありました。このことはとても大事です。

敗戦と登呂遺跡の発掘調査

（スライド７）戦後の日本に夢と希望を与えた遺跡として有名なのが、静岡県の登呂遺跡です。これは当時の発掘調査の様子の写真です。静岡市の駅南側の水田地帯でこういった農具がたくさん出ましたから、間違いなく稲作をやっていた。2,000 年くらい前の弥生時代の遺跡です。この発掘調査は昭和 22 年から３年間行われました。その成果が全国各地に、ラジオとか新聞で伝えられたわけです。

（スライド８）登呂遺跡の発掘調査は日本全国の名だたる考古学者が結集して行われました。これは現地にある登呂博物館の展示写真です。地元の中学生、高校生も手伝ったり、国会から資金難に 500 万円が送られたり、当時の 500 万円だからすごい金額です。それと食糧難の中で米が送られたりしました。この発掘調査を契機に日本の考古学で一番の学会である「日本考古学協会」が設立されました。

（スライド９）このような登呂遺跡の話は、私が文化庁へ行ってから、去年亡くなられた明治大学の大塚初重先生からよく聞きました。大塚先生は、戦時中出征しておられまして、命を何度も落としかけたそうです。しかし、日本が敗戦になって、戦前の歴史がいかに間違っていたかということを自分自身で感じ、登呂遺跡の発掘調査に参加して、そこから自分の考古学の発掘人

生が始まったと言っておられます。大塚先生の書いた本のタイトルは面白いです。『土の中に日本があった』です。土に埋もれた遺跡の中から掘り出された歴史が、真の日本の歴史だったということを言われているんです。それほど登呂遺跡の発掘は大きなインパクトを与えたと言えます。

（スライド 10）それから間もなく調査されたのが岩宿遺跡です。日本に１万年以上前の旧石器時代の遺跡は、当時はないと言われていたのが見つかりました。日本にも古い人間の歴史があったということも大きな追い風になりました。

（スライド 11）1950 年、その前の年に火災で焼けたのが、奈良にある法隆寺です。いまでは世界遺産に登録されている世界最古の木造建造物ですが、当時こんなふうに焼けてしまいました。これを教訓に、文化財を大事にするために法律を整備しなければ駄目だというのでつくられたのが今の文化財保護法です。このときに、初めて埋蔵文化財、遺跡についての規定ができました。どういう規定だったかというと、発掘調査をするときは、届け出を出しなさいという規則です。何でそういうふうになったかというと、大変面白いんです。登呂遺跡の影響で、全国各地で遺跡の発掘が大変盛んになりました。そうすると、すべての遺跡で専門家が調査しているわけではないので、ちょっと学術的に問題のある調査もあったわけです。それで、発掘調査するときは事前に国に届け出を出してください、それで発掘調査をする人が的確かどうか見ますよ、ということになったのです。

こういう状況を見ると、戦後、国民は自分の地元にある遺跡を掘ろうとしたということが各地で見られたわけです。それだけ遺跡に思いを寄せたということなんです。国や地域の成り立ちを知りたいと願って、各地で埋もれた遺跡に真の歴史を求めたと。だから、発掘調査を行うことに対して、国民の理解と協力が得られてここまで多くの発掘調査が行われてきたということだろうと思います。私は数年前まで、埋蔵文化財と言われる遺跡の発掘調査が日本で一生懸命されてきたのは、考古学に関わっている人たちが一生懸命やってきたからだとか、考古学という学問が魅力的だからとか、そのような理由だと思っていましたが、そうではないんです。多くの国民の皆さんが、遺跡って素晴らしい、そこに真の歴史があると考えたからなんだ、ということだと思います。

市民運動と遺跡保存

（スライド 12）日本の文化財保護の大きな特徴の１つですが、遺跡を市民が守ってきたということがあります。これは戦後の昭和 30 年、1955 年に古墳が壊されるのが大問題になった大阪府堺市のイタスケ古墳という古墳です。古墳はこんもりと土を積んでいますから、そこの土を工事に使うために削ることになったんです。それに対して古墳をつぶすなという市民運動が起こりました。結局古墳は保存されて国の史跡に指定されました。これで見るように、本当に遺跡を保護してきたのは、考古学の研究者ではなくて、市民の方々です。奈良の有名な平城宮跡という特別史跡、奈良時代の宮殿の跡ですが、それを確認したのは、建築史の関野貞という学者ですが、この遺跡を守ろうと立ち上がったのは、地元の植木職人の棚田嘉十郎という人です。今ああやって保存されているのは、市民の方々が声をあげたからです。

その市民の方々が団体をつくって、新潟大学におられた甘粕健先生が中心になってずっと進めてこられたのが、この文化財保存全国協議会という団体で、何年か前に 70 年の歴史を迎えたということになります。

このように遺跡を保護する制度があった

ので、1987 年、今から 35 年前、ここの開発計画があがったときに、調査をしなければならないということになったんです。考古学者が、ここに遺跡があるから何とかしなければならないといって声をあげたのではなく、そういう法律の制度があったからなんです。ここが大事です。

２．新潟にもあった古墳とその前史

（**スライド 13**）1987 年に、古津八幡山遺跡の発掘調査がされる前の話をしておきます。私は 1980 年、昭和 55 年に大学を終えて、新潟に戻ってきて、新潟県の文化行政課に就職しました。発掘調査の仕事があったからですが、その当時、新潟県で古墳というと、誰もが知っていたのがこの菖蒲塚古墳です。当時、新潟市にまだ合併される前の巻町でした。これは真上から撮った写真ですが、墓地ですね。墓地ですが、ここに何となくこういう輪郭が見えませんか。柄鏡形というか、鍵穴形、ここが丸くなっていて、ここが四角くのびています。これは、全長が約 55ｍある新潟県で前方後円墳としては最大の古墳です。これはすでに国の史跡に指定されていました。ここから出土したのがこの鼉竜鏡という県の指定文化財になっている大変いい鏡です。ただ、新潟県では甘粕先生が新潟に赴任する以前の古墳研究はさほど進んでおらず、この菖蒲塚古墳は、古墳時代でも前期・中期・後期という３つに分けると前期の古墳なのですが、前期ではなくて中期、５世紀くらいじゃないかというような評価もあったくらいです。この鏡についてもさほど重要性が指摘されていなかったのですが、大変素晴らしい鏡です。

１）山谷古墳の発見

（**スライド 14**）私が新潟に戻った 1980 年の翌年、実は大きな古墳の発見がありました。巻町の山谷古墳です。1981 年 11 月 25 日、もうしぐれ天気の季節です。発見のきっかけは、新潟県教育委員会による角田丘陵の分布調査です。当時はまだ巻原発の話があったときで、文化行政課の係長の金子拓男先生から、東北電力があの辺に鉄塔つくるから、その鉄塔をつくる場所に遺跡があると困るから見てこいと指示されました。そこで現地に行ったのが私と、私と同年齢の高橋保さんです。金子先生は「最近、山陰とか北近畿、丹後のほうで、弥生時代の台状墓、丘の上に四角いマウンド、墳丘を持っている墓が見つかっているし、古墳もあるかもしれないから、よく見てこい」と言われました。雨の中、山をずっとあちこち歩きながら、午前中に「これは古墳だな」と思ったのが、岩室村の観音山古墳でした。直径 20ｍくらいの円墳でしたね。やはり古墳があるじゃないかと。

（**スライド 15**）スライド左側が後に新潟大学が測量した山谷古墳の図面です。当日の午後、暗くなりかけたときに山谷古墳の所へ行ったら、前方部がこっち側、後方部が向こう側ですが、前方後方墳、両方とも四角のきれいな墳丘が見えました。最初は前方後円墳かなと思ったら、よく見ると両方四角だから前方後方墳でした。こんな古墳があるなんて聞いたことがないですから、本当に大変なことだなとワクワクしました。ちょうどその日が私の長女が生まれた日で、朝、妻が陣痛で入院するということで、ちょっと心配しながら山を歩いていたのですが、前方後方墳が見つかり興奮いたしました。

ところが、あとあとよく調べると、実は 1959 年に巻の藤田治雄さんという方がすでにその古墳を発見していたんです。だから私は再発見だったのです。じゃあ何で古墳と認められなかったのかというと、当時

の行政、新潟県教育委員会で、これを中世の山城だということで処理されていたようなんです。ところが間違いなく古墳で、右の写真は後に新潟大学、甘粕先生が発掘調査した際のものです。ちょうど後方部のど真ん中に大きい埋葬施設があって、ここに木棺を入れた痕跡がこうあります。人が写っていますから、かなり大きな埋葬施設であったことが分かります。

（スライド 16）右の写真は、古墳の周り、墳丘の裾辺りから出てきた土器です。二重口縁の壺といいまして、古墳に副葬する土器です。時期は古墳時代前期で、同じく前期の菖蒲塚古墳よりも古い古墳だということも、この土器の研究からわかりました。４世紀の初めとかそのくらいまでいくのではないかと思いますが、その辺はこれからの研究でもあります。

巻で古墳が見つかって新潟大学が調査していた際、今度は三条市の方が、うちの裏山にも古墳のようなものがあると甘粕先生に言ってこられました。そこで現地に行ったら前方後円墳が見つかって、保内三王山古墳群という名前になり、1985 年、昭和 60 年と翌年に発掘調査が行われたということです。

（スライド 17）山の上だけじゃなくて今の新潟市の西区、旧黒埼町の緒立八幡宮という神社の境内で、古墳らしきものが以前から見つかっていたんですが、1981 年、國學院大学の吉田恵二先生が発掘調査を担当されまして、これもやはりどう見ても古墳だということになりました。写真を見てみると、墳丘のマウンドの表面に葺石をきれいに並べています。図面をとるとこんなふうになりまして、低いほうに一列に石を並べ、それを区切るようにまた石を並べて、その間に石を充てんする、正式な古墳の葺石のふき方です。これも古墳時代前期のもので、新潟平野にはいくつか古墳があるということが明らかになりました。

（スライド 18）私がこの古津八幡山の調査に来る 1987 年のころにはいくつかの古墳が見つかっていました。まず、黒埼の緒立八幡神社古墳(6)です。それから角田山から弥彦山にかけての山麓には、菖蒲塚古墳(9)、山谷古墳(10)、それから観音山古墳(11)、それから弥彦村にある稲場塚古墳(12)と、いくつかあるということがわかりました。それから新津から三条にかけて、新津の八幡山古墳(1)、小須戸の矢代田円塚古墳(2)、田上町のウワノエゾ塚古墳(3)、加茂市の福島古墳(4)、三条の保内三王山古墳群(5)、こういった古墳がずっと並んでいまして、実は新潟には多くの古墳があるということがわかってきていました。

2）弥生・古墳の土器編年

（スライド 19）弥生時代から古墳時代の土器の研究も少しずつ進められました。これは、私が新潟に戻ってから初めてこの時代の土器を年代順に分類した編年図になります。実はこういう土器の研究も、私が自主的にやったわけじゃなくて、当時係長だった金子拓男先生が、新潟県内の弥生から古墳時代の土器をきちんと整理して研究しなければ駄目だと認識しておられました。お前は関西で考古学をやってきたのだから新潟の土器をやるように指示されまして、やった最初の仕事がこれです。大体、弥生時代後期の終わりくらいの土器、そして弥生時代から古墳時代へのちょうど端境期の土器、それから古墳時代前期の土器、ということで３つくらいに分けました。

私は大学では新潟のことをまったく知らずに新潟に戻りましたので、新潟の土器を見て最初に驚いたというか、大変感激したことがあります。なにかというと、高杯というお皿に脚がついている土器ですが、この形を見ると、私が関西で見ていた土器の

形とそっくりなんです。赤線で囲まれているのが、奈良県で出た弥生時代後期の高杯の図面です。左側が少し古くて右側が新しいものです。杯部という上のお皿の部分が、上に行くと反り返ります。時期が新しくなると反り返りが大きくなって、この口縁部が長くなるという変化があります。そう見ると、この新潟の高杯も同じ形に変化していることがわかります。関西と新潟は 500 キロも離れていてまったく無関係のように見えるけれど、そうではなく、やはり連続していて、歴史は関連していることがよくわかりました。

（スライド 20）２年後、もう一度『新潟県史研究』に弥生時代後期の土器についてちょっと書きました。そこでまず第１点として指摘したのは、現在知られている後期の土器のうち、新潟市の六地山遺跡の土器は相対的に古いと。弥生後期の前半から中頃にいく。それ以外はもうちょっと新しい後期の後半以降の土器だということです。

それから、新潟の甕を見ていると、面白いことがわかりました。有段・擬凹線、ちょっと難しい名前ですが、有段というのは、この口のところが一回ここで止まって、段があってもう一回立ち上がっていくこと。擬凹線というのは、この口のところに横方向のしま模様がついています。これを擬凹線といいます。北陸地方の中心は石川県とか福井県とかになりますが、そちらのほうにいきますと、この手の土器がたくさんありますが、どうも新潟には少なくて、こっちの単純なシンプルな形の土器のほうが多いということがわかりました。

それで、新潟の弥生後期から次の時期にかけての地域色がどんなふうに考えられるか。弥生後期後半に形成される北陸地方の地域圏の中で、阿賀野川以北を除く越後は、越中、能登、佐渡と同じように、北陸を東西に大きく分けたときに東側の地域色に入るということを言いました。そういう地域色は古墳時代になっても続くことがわかっていました。

（スライド 21）こういう研究が土台になっていって、その後私が新潟に赴任した５年後に、一時期新潟大学の助手を務めていた川村浩司さんが、九州大学の大学院を卒業し新潟県に就職されて、私と一緒にこの時代の土器をやりました。1993 年に、新潟大学で日本考古学協会の学会が開催された際、川村さんが主導して、東日本の土器の編年をやりました。編年というのは、土器の特徴を年代順に調べ、並べていく作業ですが、川村さんの研究が今の東日本の中心になっています。川村さんはその後若くして亡くなりまして、本当に残念ですけれども、川村さんがやったこの研究成果が今も生きているということです。

こうやって並べますと、古津八幡山の時期はこの一番上の時期です。これよりももうちょっと前くらい。庄内というのはちょうど古墳と弥生時代の端境期で、この布留０と書いてある、ここからが古墳時代のちょうど初頭に入ります。少し人によって言い方が違うので微妙ですが、ともかくさまざまな研究が続けられてきました。

３）高地性集落の存在

（スライド 22）もう１つ、私が新潟に来て驚いたのは、高地性集落というものが新潟にもあるということです。高い土地、丘とか山の上にある弥生時代の集落のことを高地性集落と言います。私は関西で考古学の勉強をしましたから、関西ではあちこちにあります。弥生時代中期から後期にはよくみられる遺跡ですが、新潟に正真正銘、西日本と同じような高地性集落があるということに驚きました。現在の妙高市（合併前：新井市）に斐太（ひだ）遺跡という遺跡がありますが、この遺跡は以前から大変有名でし

た。位置としては、JR 信越線で直江津から長野に抜ける鉄道、新井を越えて脇野田を越えて、ちょっと長野よりに行った山の上にあります。ふもとの平地との標高差が 60ｍから 70ｍくらいあります。緑色に塗ってある所が遺跡の範囲でして、赤いドットで示しているのが竪穴住居のある場所です。全体を発掘調査しているわけではないのですが竪穴住居がどこにあるかがわかります。普通は発掘しないと竪穴住居がどこにあるかわかりません。何でわかるのか。この遺跡は豪雪地帯にありますから、北海道もそうなのですが、冬季に雪で覆われる期間は、竪穴住居跡のくぼみに土砂があまり流入しません。その期間が長いので自然のままでは完全に埋まらないんです。ですから現地に行くと、竪穴のくぼみがはっきりと残っています。それから、地図上に黒い線が引いてありますが、これは環濠という大きな堀です。こういう遺跡が弥生時代後期の新潟にあります。なぜこういった遺跡があるのかということですが、弥生時代後期に西日本から北陸にかけて、倭国大乱といった戦乱があったと。それに備えるために高い山にムラをつくった、そういう遺跡があると考えられています。

（スライド 23）環濠というのはムラを防御するための施設です。Ｖ字の大きな深い堀をムラの周りにめぐらします。そうすると簡単にムラの中に入ってこられないということです。これは新津の古津八幡山遺跡の環濠ですが、このように人がすっぽり入ってしまうんです。これは２ｍのポールです。

（スライド 24）こういう環濠を持つ、高い山にある高地性集落が西日本にはよくあります。例えばこれは瀬戸内、香川県にある日本の考古学史上大変有名な高地性集落で、紫雲出山（しうでやま）遺跡と読みます。標高差 300ｍくらいのすごく高い山のてっぺんに遺跡があることで有名ですが、こういう遺跡が新潟にもあることにおどろきました。

（スライド 25）これは新潟県の地図ですが、斐太遺跡というのはここです。頸城の、これは関川という川で、長野に抜けるちょうど北陸と信州との境目の所につくられているのが斐太遺跡という高地性集落です。これはやはり北陸と信州との集団間の何かがあるのでしょうね。純粋に戦いのためではなくとも、物資を確実に流通させるため、あるいは安全に人が移動させるためとか、人の移動などの知らせをするとかというようなことで使われることも考えられます。こうした高地性集落がこちらの蒲原平野にも実はあるということがわかりました。

（スライド 26）見附市の大平城遺跡は、私が新潟県へ就職したときにはすでに工事が終わっており、全然残っていませんでした。これは報告書に載っている図面です。これも北陸自動車道の高速道路の土取りで実は全部もう削平されたのですが、堀があって、当時の新潟県では大平城跡、城跡として調査され、報告されています。ところが、遺跡からは弥生時代後期の土器しか出ていません。それでこういった深い堀をめぐらしてるということですので、これも高地性集落で、環濠を持つ集落であるということがわかりました。

３．古津八幡山遺跡の発見（1987 年：第１次調査）

調査対象地と確認されていた遺跡

（スライド 27）私が 1987 年、新津の古津八幡山の調査に来るまでの間は、このように弥生時代後期から古墳時代の研究をしていました。研究といっても大した内容ではありませんが。そこに持ち上がったのが、磐越自動車道建設に伴う盛り土のための土砂採取です。この辺一帯全部丘だったので

すが、全部削り取ると。そこで事前に調査を行うことになりました。当時の遺跡地図を見るといくつかの遺跡がすでに確認されていました。鳥撃場遺跡という縄文時代の遺跡、それから埋葬地遺跡という縄文時代の遺跡。ここ３年くらい新潟市が発掘調査をして、大型の竪穴建物が見つかったり、方形周溝墓という大きなお墓が見つかったりという話があり、評価が変わりました。すでに新潟市文化財センターの相田さんからお聞きしていると思いますが、それらが見つかったのがもともと縄文時代の遺跡だった埋葬地遺跡の周辺です。また、古墳が見つかった場所は、八幡山城跡という中世・戦国時代の城があるというふうに考えられていました。それから居村製鉄遺跡といって、奈良時代から平安時代にかけての製鉄、鉄をつくっていた遺跡があるというふうに台帳にちゃんと記載されていました。ですので、これらがどんな遺跡なのか、これ以外に遺跡がないのかということを調べるということが調査目的でした。

調査期間は９月 28 日から 10 月９日の２週間でした。そのうちの、最初の週は私の先輩の戸根与八郎さんが担当して、私は２週間目に交代で来ました。そのとき私は、上司の寺﨑さん、新潟県考古学会の会長を務められて、この前交代されてお辞めになられましたが、寺﨑さんから「ここは中世の城があると言われているけれども、これが本当に城跡か。古墳かもしれないし、高地性集落も新潟にあるから、十分よく見てくるように」というふうに指示を受けました。その結果見つかったのが、大型の円墳とか弥生時代の集落とか、それからあまり話題にならないのですが、古代の製鉄遺跡もたくさん見つかりました。

（スライド 28）当時の地図はこんな地図でした。線が引かれている範囲、谷を１つ挟んでふたつに分かれた、この線引きした範囲の土を取るということになっていました。現在、新津美術館がここの谷の入り口にあります。谷奥に入っていきますと、新潟県の埋蔵文化財センターがこの辺にある。この谷の奥は金津という集落がある谷になっているので、あそこまでは全部土取りをしない予定でした。ここが今の植物園の場所です。八幡山城跡はこのＢという所、Ａは埋葬地遺跡、最近大きな方形周溝墓が見つかった場所、それからここは鳥撃場遺跡とか居村製鉄跡がありました。

これはふもとのほうから見た写真ですが（スライド 28 左上）、標高差 50ｍくらいの緩やかな低い丘のてっぺんが、八幡山城跡があるという場所です。それで発掘調査したら、これがぜんぶ古津八幡山遺跡という弥生時代の遺跡になりました。これは当時私が平板という測量器具を使ってつくった図で、古墳とわかったものです（スライド 28 左下）。ここに書いてありますように、当時、大気観測所が置かれていました。どうも八幡山と呼ばれていたのは、観測所がつくられる前はここに八幡神社があったためのようです。また、観測所の周辺は段切りがされていて、段々畑となっていたのが何となくわかりました。

（スライド 29）今の地図と見比べると、ここに谷が入っていて、ここに美術館があります。弥生の丘展示館はここにありまして、植木屋さん、フラワーランドがここになります。ここに古津八幡山古墳と書いてありますが、城跡と言われていたところです。ここが埋葬地遺跡で、ここはまったく遺跡がわからなかった所です。何度も言いますが、こちら側半分、あまり話題にのぼらないのですが、ここにはすごい量の製鉄遺跡がありました。

城跡は大型円墳だった！

（スライド 30）まず城跡があった場所ですが、現地へ行って変だと思いました。こ

んな輪郭の堀がある。中世の戦国時代の山城の堀は大体真っすぐです。なのに、これは弧状で円を描くような平面形です。そしてでかいんです。すごく深いです。私が行ったときにすでにトレンチがいくつか入っていまして、これはそのトレンチの断面ですが、一番下に黒い土が入っていて、上に黄色い土がきれいに積まれている。下をよく見ると縄目の土器が出てくるんです。これは変だな、縄文時代の遺跡があるのかなと最初はとっさに思いましたが、よく見ると弥生時代後期の天王山式という東北地方の特徴を持った土器でした。そういう目で見ていくと、この網目がかかっているところは、弥生時代の土、地層が残っていると。断面を書くとこうなるんです（スライド 30 左下）。そうすると、この上に載っかっているきれいな土は、どうも周辺から土を集めて盛った盛り土、人工的に盛った土だというのがわかりました。

10 月５日、最初の日来たときから変だ、変だと思って、断面とかいろいろ見ていて、八幡山はどうも大円墳じゃないかと思いました。私は大学３年のときから 50 年近く吉川弘文館の歴史手帳という黒い手帳を持っていて、毎日何があったかを書いているのですが、その当時の手帳を見ましたら、その日のメモには「大円墳か？」と書いてあります。その後３日間は、山じゅう製鉄遺跡を探し回っていました。私は漆に弱くてかぶれるので、１週間終わってから皮膚科に行きました。そのことも書かれていました。もう顔中真っ赤になりました。学生時代から漆にかぶれることはわかっていたので、今でも漆の木はすぐに見分けがつきます。だからいつもは除けるのですが、山の中で遺跡を探すのにそんなに除けてられないですよね。結局、顔中真っ赤になりました。

５日目、最終的にこの盛り土を平板で実測すると、まるい形になって、コンパスで直径 50ｍくらいの円を書くと、ちょうどその円の中に収まる範囲にあることが分かりました。直線的な地形はしているのですが、やはりこれは古墳なのだろうと。ちょっと足が震えるというか、そんな感じがしました。

（スライド 31）この辺は１ｍ50 ㎝くらいの大きな段差があって、トレンチを入れると下に黒い土が出てくる。こんな状態ですね。

（スライド 32）それで中世の山城の堀跡と言われたところを、地元から来てもらった方々に１ｍ幅でずっと掘ってもらいました。

（スライド 33）そしたら１つは、これわかりますか。よく見てください。黄色っぽい土です。こっちはちょっと黒っぽい土です。考古学で、何でそこに竪穴住居跡があったかわかるかというのは、土の色を見て、土の違いで見分ける。ここで、明らかにこっちは黄色いきれいな土が、境目がこう落ちるんですね。ここは平らになって黄色い土になる。私たちは人の手が加えられていない土を地山（じやま）といいます。段差が 30 ㎝以上ある窪みに黒い土が入っていて、ここにちょっと明るい土が入っています。これは竪穴住居が埋まっていく過程で、土が流入していった跡だということがわかりました。古墳の下には竪穴住居が埋もれていると。

（スライド 34）そしてその古い地層の上には、こういうきれいな周りの土を積んだ盛り土があって、これは古墳の盛り土だと。ずっと下へたどっていくと盛り土がなくなるんですが、これは堀の中ですね。上のほうはこんなふうにきれいな盛り土があります。だから人工的に土を盛った古墳だということがわかりました。これは調査量としては比較的楽でした。大変だったのは、何度も言いますが製鉄の遺跡です。

広がる製鉄遺跡の確認

（**スライド 35**）45 ヘクタールもの山の中、どこに製鉄の遺跡があるかを調べるのは、木が生えていますから至難の業です。ところがここは、柿団地がすでに造成されていて、平坦地をつくるのに山を削った斜面が結構あちこちにあったんです。そこをジョレンという道具で作業員さんたちに土を削ってもらいました。そうしたら、このように真っ赤に焼けた土が見えてきました。ここもそうです。こちらは何もない地山で、ここに赤くて炭が少し入っているような土が見えるんです。これは炭窯の断面です。こちらは調査期間中、新津市の文化財審議委員をされていた田村賢雄さんです。小川重蔵さんなど、考古学の専門家の方たちも応援に来てくれました。こうやって探しました。

（**スライド 36**）これは本調査をしたときの製鉄の遺構です。ここに製鉄炉という西洋風呂みたいな形をした、長さ２ｍくらい、高さ 70～80 ㎝の炉があります。製鉄は、炉の中に砂鉄と炭を投入して、温度を上げて砂鉄から不純物を取り除いていくのですが、それには大量の炭がいります。そのために、製鉄遺跡では必ず周辺に炭窯をたくさんつくります。ここに黒い溝が見えますが、これが炭窯です。１基、２基、３基と。製鉄炉が１つあれば、最低３つか４つ炭窯があるということになります。

（**スライド 37**）製鉄炉は上から見るとこんな形をしています。

（**スライド 38**）福島県で製鉄実験を行っていて、これが炉を復元したものです。西洋風呂みたいな形をした炉の中で、炭と砂鉄を入れて高温にして不純物を取り除くのです。この人たちが何をやっているかというと、炉の中を高温に上げるためにフイゴという道具を使って風を送っているんです。この炉の下にフイゴの送風管がついていまして、ここをシーソーのようにして踏むと風が炉の中に送られて高温になるという仕組みです。この作業を２昼夜くらいやります。炉の中を見ると赤々と燃えていますね。今でも、こういうような古い方法で日本刀の材料をつくることを島根県ではやっています。

第１次調査のまとめ

（**スライド 39**）私は調査に１週間しか参加しませんでしたが、都合２週間の調査が終わりまして簡単な報告を作りました。そのときに私はまとめにこう書きました。１つ目は八幡山城跡で、これについては堀と盛り土の形状・構造から中世の山城とは考えられず、古墳時代の円墳と見るのが妥当と考えられると書きました。仮称八幡山古墳という名前をつけて、古墳であるとしました。いくつか説明を加えたあと、直径 55ｍ以上の円墳とすれば県内最大であると。このあと新潟大学が 1991 年に測量調査をして、間違いなく直径 55ｍもある大円墳だということが証明されました。

２つ目は、古墳造営前にはこの丘陵尾根上に弥生時代中期から後期の集落跡が存在する、仮称八幡山遺跡としました。これは、これまでまったくわからなかった遺跡です。遺跡の広がりはこのときの調査では確認できなかったわけですが、尾根のピークまで延びていたことは確認されたと書いています。古墳があった場所よりもさらに南側に高いピークがあって、そこまで延びているということは確認したのですが、広がりがまったくわかりませんので、あとできちんと詳細な調査をする必要がある、と書きました。土器は東北地方南部に分布する天王山式土器で、県内では数少ない例だと。なお、丘陵尾根上に立地することから、一般的な農村ではなく特殊な性格を持つものと考えられると。高地性集落とは書きませんでしたが、高地性集落であることは明らか

であったので、普通の低地にある農村ではなくて、特殊な性格を持つと書きました。弥生時代の集落、古代の製鉄遺跡は分布・確認調査が不十分なので、さらに詳細な調査を要する、というふうに結びまして２週間の調査を終えました。

考古学をやっていますとこういう場面にたまに遭遇するのですが、すごいものを見つけていますからやはり胸が躍るんですね。ただ、この場所は土取り工事をするということで調査をしていますから、土取り工事をされたら遺跡が壊れるわけです。本当に壊れていいのかと、気持ちが行ったり来たりしながら、やはりすっきりしないまま調査を終えたということです。

私が参加した１週間の成果をお話しましたが、これからが本当にいろいろと大変でした。今回この資料をつくりながら、いろんなことがあったな、と思い返しましたが、結果的にある程度遺跡を残せて、今現在、冒頭で申し上げたような素晴らしい場所になったということで、私はすごくよかったと思います。

1987 年の 10 月に調査が終わり、そのあとから、地元の方々、新津市の文化財審議委員の方々が調査に参加されまして、すごい遺跡が見つかったということがわかってきました。それから、調査をやっているときも、これはすごい古墳ですということを新津市の方にも申し上げました。当時、社会教育課の課長さん、のちに市長になられた湯田さんに、これだけの古墳はもうつぶせませんよ、と私は申し上げました。脅すようなことだったかもしれませんが、そんなことを言った記憶があります。

４．保存の声と確認調査の継続

１）講演会「新古今集」1988,2

（スライド 40） 調査から１、２か月くらいしたあとに、新津市青年会議所の片岡さんが、私が仕事をしている内野にあった県の曽和分室という所を訪ねてこられました。片岡さんは、大変な遺跡が出たと聞きましたと。そういった遺跡は新津にとっても大事だと思います。だから、何とか保存して今後のまちづくりに生かしたいと。私にとってはすごく新鮮でした。市民の方がそのように遺跡に対して期待を投げかけてきた。それに対して私は、こういう遺跡の保存問題については、新潟大学に甘粕先生という全国的によく知られた先生がいますから、甘粕先生の所に相談に行ったらいいですよ、とお伝えしたら、甘粕先生の所に行かれたんです。片岡さんはこの成果を市民の方に伝えたいと言われまして、翌年の２月 11 日、建国記念日に講演会を開催することになったわけです。この右側は、私が当日用意したレジュメの原稿です。黄色くなっているのはそのせいですが、ここに新津市民会館と書いてありますね。新津市古津、そして地元の方は読めると思いますが、蒲ヶ沢（ガワソ）遺跡群の調査、ガワソと地元の方は言われていました。私が調査成果を報告して、それからその遺跡の意義について新潟大学の甘粕先生が講演するという、２本立ての講演会でした。そのタイトルが、「新津の古代に思いをはせて」ということで、この集いが「新古今集」、新津の古代と今を考える集い、新古今集、これはなかなかいい言葉だなと思いました。古代と今、考古学をやっていると古代のことを考えますが、今のことを必ずしも結びつけて考えないのですが、古代と今を考える。これは昔の古い遺跡を新津のまちに残して保存して役立てたいと、そういう思いがあるということをこのタイトルから知って、非常にうれしくなったのを覚えています。

左下の写真、これ私ですが、やっぱり 35 年前は少しは精悍な顔ですね。今はもう白

髪頭で記憶も定かでないような、日々忘れ物をしたりして大変ですが、このころはまださすがに若いもんだなと思いました。

（スライド 41）私が当日用意した資料がこれですが、古墳の分布図の左上に、こういう図をつけました。大きさ比べとかと書いて、当時最大の古墳は前方後円墳としては最大が菖蒲塚古墳で 55mくらいですが、ここに 50mのスケールを書いてありますので、ほぼそれと同じくらいだとわかります。すでに見つかっていた三条の保内三王山古墳はそれより小さい、35mくらい。古津八幡山古墳というのはそれを上回る円墳ですから、こういうでかい古墳であり、まぎれもなく県内最大だということを、この図面で表したかったということです。

それから、弥生の高地性集落というのはどういうものかというのを説明するのに、当時私はこういう、小学館の『少年・少女人物日本の歴史』第２巻 卑弥呼、という巻を持っていました。こういう漫画を見ていると昔の様子が非常によくわかる、伝えられるわけです。弥生時代の高地性集落のイラストがこれです。先ほどの香川県の紫雲出山遺跡のようなものをモデルにしてこういうものが描かれています。周りを板塀がめぐっていて、周りから攻められても敵が入り込めないようにしています。煙を出しているのは、通信手段としてのろしが使われたというようなことを考えてこのイラストが描かれています。弥生時代の後期というのは、魏志倭人伝に倭国大乱、倭国乱れるというふうに書かれていて、戦乱状態にあったと考えられています。倭人伝にはたくさんのクニが出てきますが、邪馬台国連合には 30 くらいのクニが含まれるとあります。いろいろな戦いの中でそれらがまとまっていくというふうに考えられていて、必ずしも平和な時代ではなかったということがうかがえます。

当時、奈良国立文化財研究所におられたのがこの佐原眞先生です。佐原眞先生は、当時から、考古学者の説明は非常に難しい。専門用語ばかり言っていて、何を言っているかわからない、こういうことでは国民の支持が得られない、大事な遺跡を守れない、ということを言われ、考古学を易しく、と主張されていました。その佐原先生がこの本の監修者で、弥生時代の専門家です。そのことに刺激を受けて、私はこのような漫画を使ったレジュメを用意しました。甘粕先生から講演会のあと、私のこの説明はよかったよと言われてすごくうれしかったのを覚えています。

2）第 3 次調査（1988 年６月～9 月）

（スライド 42）私が担当した１次調査では結局遺跡の範囲がわからない、実態がわからないということで、その年続けて２次調査が行われて、さらに翌年、６月から３次調査が行われました。この調査は、笹神村在住の川上貞雄先生という、日本考古学協会の会員の考古学の専門家が行いました。川上先生が担当したのは、新津市にはまだ考古学の専門家がいなかったからで、私が県から派遣されてきたのも、考古学の専門家がいなかったからです。川上先生は非常にいろんな調査をされていて経験豊富で、的確な判断をされる人です。それで、ここの確認調査をされたときに、細いトレンチ、幅２ｍとか３ｍの細いトレンチでは様子がわからないということから、幅 10mのトレンチを山の上からずっと入れました。これは等高線に並行して入れたトレンチです。すると、もうどこからでも竪穴住居が出てくるんです。これは全部竪穴住居です。ここは環濠が出てきました。竪穴住居だらけ。私も思いましたけれど、予想以上に内容が濃いなと。

（スライド 43）これは竪穴住居なのです

が、斜面の高いほうはこういう掘り込みが残っていますが、低いほうは斜面の下なので土が流れています。

（スライド 44）でも復元をするとこういう竪穴住居が累々と見つかったということになります。

（スライド 45）もう１つ驚いたのは、丘の一番高い所から前方後方形のお墓が見つかったことです。これです。山谷古墳が前方後方墳なのですが、これは古墳とは呼びません。周りに溝がめぐるお墓ということで、前方後方形周溝墓と呼びます。前方後方の形が芽生えたころのもの、というような位置づけになります。竪穴住居は 16 基も見つかり、柱穴だっていっぱいあり、環濠も出てくる。さらには方形周溝墓という四角い墓だけではなくて、このような前方後方形の周溝墓も見つかる。この調査で遺跡は大規模であることが明らかになり、竪穴住居や環濠が見つかって、遺構も多くて内容も豊富になったということです。前方後方形周溝墓は有力者の墓ということになりますから、この遺跡の集団関係には、何ランクかの階層があるということになるわけです。

（スライド 46）これは現在の遺跡の図になりますが、この古墳のほかに、この辺を掘って、ここの環濠をあてているんですね。それからここ横にずっと２列掘りまして、この竹色はみんな竪穴住居、青は環濠が見つかっていて、一番高い所に前方後方形の周溝墓が見つかったと。まだ南側はほとんど掘っていない状況で、遺跡の広がりはわからないところがありましたが、遺跡の重要性は増していきました。

（スライド 47）それで青年会議所の方々が、今度はさきほど私がとりあげた佐原眞先生を奈良から呼んで講演会をされました。ちょうど確認調査をやっている最中です。それからもう１人、同志社大学の森浩一先生。森先生も全国各地で講演会をされていた、大変有名な考古学者です。よくこういう有名な人を引っ張ってきたもんだと思います。９月、10 月と続けざまに講演会をやっています。保存要望も、地元の文化財審議委員の方、それから考古学協会の県内に在住している方々、それから今度は考古学協会の本部から、そして新津市郷土史研究会の方々は、それほど人口が多い所ではないのに 8,000 人の署名を集めました。文化財保存全国協議会、通称文全協と呼ばれる団体も、1,400 人の署名を集めて提出いたしました。このように保存の声は盛り上がる一方でした。

３）第７次調査（1990 年 7 月～8 月）

（スライド 48）1990 年の７月ごろの写真ですが、植物園のほうは全部調査が終わって土を取ったところです。かなり低くまで土を取っています。もともと土取り事業でしたので保存すべき部分が増える分、採れる土の量が計画よりも減ったので、この部分は土取りの底面を何メートルか低くしたという話を聞きました。

（スライド 49）南のほうではこのように尾根を断ち切る環濠も出てきました。これはスパッとＶ字の溝を掘っています。部分的にしか掘っていなくて、ここも掘れるのですが、調査の確認のためにまだ掘らないで残しているのですが、人がすっぽりと入るくらいの大きさです。ここで通行を遮断するということです。

（スライド 50）それから延々とまだ竪穴住居が出てきました。人が作業をしていますから大きさがわかると思います。

（スライド 51）これは植物園予定地を眺めたときの写真で、かなり本格的に調査が進んでいます。

（スライド 52）製鉄遺跡も私がやった調査ではまだ十分確認していませんでしたの

で、山の木を切りまして、土を取っていって、本当にないかどうかというのを確認していきました。

（スライド 53）やはり製鉄炉がいくつか出ました。左右同じ製鉄炉ですが、西暦でいうと 12 世紀くらい、平安時代の終わりごろの製鉄炉です。もうカチンカチンに焼けた炉の跡が残っていて、これはすでに調査をしていますが、この辺から砂鉄を溶かしたときに出る大量の鉄滓、鉄分はほとんど入っていませんが鉄くずです、それが大量に出ました。こういう調査も並行して行いました。

遺跡保存の取扱い決定へ

（スライド 54）６次調査では調査の過程で１つトラブルがありまして、当時見つかっていた炉跡と言われる遺構が工事の途中で壊されるということがありました。まだ確認調査が全体に十分進んでいなかったということもあり、このトラブルを契機に市のほかに県教育委員会も一緒に確認調査をして、判断するということになりました。これは当時の県の教育長、堀川さんという教育長の判断でした。新津出身だと聞きましたが、非常に的確な判断をされる県の行政マンですけれど、私はこの後「沼垂城」木簡が出土した八幡林遺跡の保存についても、いろいろ助けられた教育長さんでした。こうして私は第 7 次調査の現場に参加することになり、新津市に最初に非常勤嘱託で入った渡邊朋和さんという國學院の考古学卒の専門家と、一緒に調査をするということになりました。

このような経緯もあり、結局、この７次調査で、全体の遺跡の取り扱いを最終的に決めることになりました。その７次調査をやっていた 1990 年、平成２年の８月８日に、文化庁から、河原純之さんという主任文化財調査官に来てもらいました。なぜ来てもらったかというと、私たちはこの遺跡は、将来的に国の史跡にしたい、いや、史跡にすべき遺跡だと考えていました。国の史跡にするということは、文化庁の人が認めてくれないと国の史跡になりませんので、現地に来て見てもらうということです。そしてまた、ここが保存問題で揺れている遺跡だったので、国の専門家から保存の考え方について、ある意味お墨つきをもらいたい、ということでした。河原さんは、私が調査に入っていた７次調査の最終段階、お盆の前に来られまして、主要な範囲をほぼ全域見て歩きました。そして、河原さんは「東の吉野ケ里遺跡」だと評価されました。河原さんは吉野ケ里遺跡が大問題になったときの主任調査官ですから、吉野ケ里と言ったということは、あの遺跡が工業団地の計画を中止して国の史跡になったわけですので、私たちにしたら国の史跡になる遺跡、つまり保存すべき遺跡だという評価をもらったと思いました。国の先生はあまりはっきりおっしゃらないんです。でも東の吉野ケ里だと言ったのはそういう意味なのです。

私がこのときにすごく教えられたのは、河原先生は遺跡は大事だと、ここを残せと言われましたが、新津市の公園計画がありましたので、その公園計画にも配慮されていました。配慮されたというのは、重要な遺跡をつぶせと言ったのではなくて、ぎりぎりであっても土量も必要だろうし、そのあとの公園計画もあるので、それにも配慮することを指示されました。この図のちょっと濃いめになった部分は、古墳があったので最初から完全に残すことを決めていて、さらにここも残すということになったんです。斜線が引いてあるここは、河原先生から工事に譲るように指示されたところです。この協議の席で、新津市の川瀬さんという教育長が、ここは新津市にとって大事な公園計画がありますと言われました。そのとき、私は「いや、そんな計画なんかは遺跡

の重要性からみれば必要ないではないか」というようなことを、ちょっと偉そうに口をはさみました。生意気だったと思いますね。そのとき河原先生は、「坂井くん、余計なことは言わんでよろしい」とビシャリと言われました。さすが国の先生だと思いました。要するに、遺跡保存だけではなく土取りや公園事業も必要性があって行われるのであって、どちらか一方が勝者ではないということを教えられたのでした。

その３か月後、11 月の終わりに、改めて新津市と県の間で取り交わした文書がこういうことでした。ここは残すと。20 ヘクタールくらいでした。①大入製鉄遺跡というのはこの辺なのですが、そこは保存する。②土取りラインには傾斜をつけて、可能な限り自然景観を保護する。③八幡山古墳の重要性に鑑み、調査成果を速やかに報告書にまとめ、公表する。④県と市は当該遺跡が国指定史跡になるよう積極的な方策を講じる。市が進めている公園計画の実施にあたっては、遺構を表示するなど遺跡公園として配慮する、というようなことを決めました。新津市は、自治省の「花と遺跡のふるさと公園」というものを計画しまして、その中で保存する遺跡については、遺構の表示もしながら残す、公園整備をするということになりました。

皆さんに申し上げておきたいのですが、国の史跡というのは国が指定するんです。確かに財政補助は国がします。しますが、現地での作業を誰がやるかというと、これは基本的に市町村が担うんです。新津市が指定されるまでの 15 年間、そのあと 10 年くらいの整備事業は、全部新津市とそれを引き継いだ新潟市がやったということです。私は、最初の約束を破らず、15 年間きちんと事業を進め、今のあのような形にした新津市と新潟市の労は大変大きく、それをたたえたいと思っています。

１つここで、小さい字で入れておきましたが、この直前に長岡市に合併された和島村の八幡林遺跡で「沼垂城」の木簡が突然出土しまして、実は内部では大騒ぎになっていたんです。ですが、トップシークレットですから言えないまま、私は悶々としながら新津市に来て、この協議にあたったということになります。

５. さいごに－遺跡の意義

古津八幡山遺跡の重要性と前期古墳

（スライド 55）これは新潟市文化財センターの相田さんが最近までの成果をまとめた図です。これを見ながら、最後に遺跡の意義を簡単にまとめておきたいと思います。1987 年の第１次調査から、2022 年度までの 25 次調査まで、もう延々と調査を続けてきました。これはひとえに、すごい遺跡だったということなのですが、私が予想できなかったのは、埋葬地遺跡と呼んでいた山の反対側のふもとにあった縄文時代の遺跡ですが、近年ここで大型の竪穴建物が見つかりました。もうほんとにでかいです。それからさらにこの北側を掘っていったら、今度は大型の方形周溝墓で埋葬施設が４基もあるものが見つかりました。そんなに複数の埋葬施設をもつお墓はそうそうないんです。しかも、埋葬施設は木棺をじかに埋めるのが普通ですが、ここのお墓は、一番中心部の埋葬施設については木槨をつくっています。つまり木材で部屋をつくって、その中に木棺を入れている。こんなに手厚く埋葬しているお墓が見つかりました。私は本当に思いもよりませんでした。要するに、この遺跡は大規模で長期間継続しており、しかも重層する階層が存在するということを物語っているということです。

（スライド 56）これも相田さんがまとめられた古津八幡山遺跡の動向を示した表で

す。集落の始まりは弥生時代後期の前半、半ばくらいの時期です。西暦で言うと、ここに 100 という数字が見えていますので、西暦１世紀の終わりごろから、もう少し古いかもしれませんが、そのころから始まって、土器の編年で言うと１期、２期、３期、４期、５期、６期とずっと続きます。畿内の編年で言うと、７期あたりから布留式土器という古墳時代に入ります。その前が弥生時代終末期、最近は終末期のことを古墳時代早期とも言ったりします。こうしてみると、古津八幡山遺跡は非常に長い期間営まれています。越後の同じ時期の遺跡と比べてかなり長いわけです。こういうことは掘ってみて初めてわかることですし、古墳だけ掘ってもわからないことです。

（**スライド 57**）ここで私が注目したいのは、渡邊朋和さんが詳細な報告書にまとめたなかで、ここの土器が３系統に分けられるということです。右上に土器を示していますが、まず北陸系の土器、あまり模様がありません。もう１つは北の東北系の土器。縄目が転がっています。さらに、この新津の古津八幡山遺跡では八幡山式、地元系と言われる土器も出ています。地図で言うとここですね。ちょうど新潟市周辺は北陸系と東北系の２つの文化圏が重なる、交わる場所だということです。八幡山式という地元系の土器はどういう土器かと言うと、東北的な土器の形に、北陸的なハケ目という調整技術、表面を整える技術でつくられている土器です。要するに東北系と北陸系の両方の特徴をもった、２世みたいな土器がこの地元系ということです。このような独自の様式の土器が生まれるということは、それを生み出すだけの人口とか生産力が、この地域で保持されていたということなんだろうと思います。ちょっとスケールが違いますが、縄文時代中期の火焔式土器という様式は、この新潟県の雪国の独自の様式ですが、その時期というのは非常にこの地域が栄えて、人口も多くなるわけです。そのような時期に越後式と呼んでもいいような火焔式土器ができるというのも、同じような背景なんだろうと思います。

（**スライド 58**）古墳の分布を地図で表すと、ここに角田、弥彦の古墳群、越後平野の海岸寄りの西側の古墳群、それから越後平野の東側の新津から三条までの古墳群。さらに、ずっと信濃川をさかのぼった、寺泊とか与板とか和島とかという所にも１つ大きな塊があります。３年前ですかね、角田浜妙光寺山古墳という全長 50 メートルもある立派な古墳がこんなところで今どき見つかるんだなとびっくりしました。これは比較的古い時期だと考えられるので、要するにこの古墳群の継続時期が長いということです。

（**スライド 59**）角田・弥彦山麓の古墳群では、一番古い弥彦村の稲場塚古墳とか、それから山谷古墳があって、前方後円墳の菖蒲塚古墳があります。先ほど言ったこういう立派な鏡とかヒスイの勾玉とか、管玉がある。大変副葬品が豊かです。妙光寺山古墳というのは、古い稲場塚古墳と山谷古墳のその間くらいじゃないかと思いますが、何世代かやはりつながっている、それだけ有力な古墳群です。

弥生時代後期からヤマト政権の成立

（**スライド 60**）この古墳文化の中心地といえば、ここに日本地図がありますが、やはり畿内の大和から河内、大阪、ここに古墳時代の中心地があるわけです。古墳時代の１つの勢力圏、ヤマト政権の範囲というのは、新潟県から九州、鹿児島辺りまでの範囲ですが、７世紀後半の律令国家の時期になると、その範囲がほぼそのまま律令国家の範囲になります。このヤマト政権ができる３世紀半ばの前の段階に何があったかというと、先ほど言った高地性集落という

のがほぼこの地域、越後平野まで分布しているということです。高地性集落を生む社会情勢というものが、このヤマト政権の１つの政治勢力を形づくっている重要な出来事だということがわかります。

ヤマト政権以前、日本海北辺域では高地性集落の成立がほぼ重なる、と書いてありますけれども、高地性集落ができる弥生時代後期というのは、日本列島の中で大きな出来事があります。それは何かというと、鉄の使用です。弥生中期までの日本列島では、鉄はわずかしか使っていません。斧と言えば石の斧、矢じりと言えば石鏃。それが弥生時代後期、西暦１世紀、２世紀になると、ぱたっとその石器がなくなるのです。どこから鉄が入ってきたかというと、朝鮮半島から入ってくるんです。それに応じて、この地域で大きな社会変化が起こるんだろうと思います。

特に、弥生時代後期、中期から後期という境目は、ここに書きましたけれども、後期の初頭に遺跡が断絶する、中期まであった多くの遺跡が衰退するのです。それからしばらくあまり遺跡が見られないのです。弥生時代の後期を４つに分けると、最初の１期、４分の１くらいの時期は、目立った遺跡がほとんどみられない時期になる。そのあと、この新潟県には多くの遺跡が出てくる。それは同じように、この石川県の金沢平野でも、法仏と言われる弥生時代後期の時期になるといっせいに遺跡が出てきます。だから、鉄器が大量に入ってくると、開発も盛んに行われて、人口も増えてくる。その流れは、恐らく山陰とか北近畿とかから、この北陸などに流れてきて、さらにその力が越後平野に及ぶということを考えるべきではないかと思います。

（スライド 61）ヤマト政権の中心地は大和盆地の東南部、纒向遺跡などが知られている場所です。ヤマト政権成立時の最初の古墳が、桜井市にあるこの箸墓古墳だと言われています。全長 280 メートルもある立派な古墳です。

（スライド 62）奈良盆地がここにありますね。大阪湾は西側にあります。反対側、奈良盆地の東側に行くと伊勢湾に出ます。ヤマト政権の中心部はここに成立するんです。間違いなくここです。箸墓古墳とか、古い巨大古墳が６基も連続してバタバタバタと造営されていきます。何でここにヤマト政権の初期の本拠地ができるのか。右下の小さな図は日本列島の地図ですが、当時の日本列島の西日本と東日本をつなぐうえで、地理上もっとも一番つくりやすい地点がここですね。近鉄電車で大阪難波から乗りますと、名古屋行きの特急はここを通っていくんです。ここを通っていきまして、桜井を通過して東へ抜けるこのルートで津に出て名古屋へ行くのです。そうすると、伊勢湾と大阪湾をつなぐ、その中間地点として一番適しているのがここです。ですから、初期のヤマト政権の本拠地である纒向遺跡はここ大和盆地東南部にあって、一番古い巨大古墳の箸墓古墳がこの地にできるということです。最近、纒向遺跡というのは箸墓古墳ができる３世紀半ばよりも 70～80 年は古くできているとされています。要するに、纒向遺跡は、邪馬台国の時代からここに存続しています。これは明らかですので、ここがヤマト政権になる前の政権、中国の歴史書でいう邪馬台国、その本拠地ではないかと言われているということです。

そういう時代と、この越後平野は、まったく無関係ではないということです。そのことを常に意識して歴史を考えることが重要だと思います。

越後平野と古津八幡山遺跡

（スライド 63）これが最後のスライドになります。ちょうど弥生時代後期が終わっ

て古墳時代に入るその端境期。考古学では庄内式期という名前がついている時期で３世紀前半です。この時期の人とモノの流れを表したのがこの図になります。国立歴史民俗博物館にいる考古学者、松木武彦さんがこの図をつくっているのですが、この図は全国のさまざまな遺跡の発掘調査のデータを総合して、人の流れを表すとこうなるだろうということをビジュアルに示している図です。弥生時代後期までいろんな地域の土器はあまり活発に動かないのが、この時期になると、新潟もそうですけれど、弥生時代後期の高地性集落がなくなると非常に活発になります。この地域の土器は、長野とか群馬、そして福島、山形と、この周辺地域、関東から中部地方に広く動くようになります。これは、この地域の人が移動しているということを示しています。新潟にとって大事なのは、日本列島の広い範囲の北近畿、北陸、東海、中部高地、会津、そしてヤマト政権の勢力内には入らない北日本と、新潟が、越後平野でつながるということです。なぜならば、恐らく弥生時代後期から古墳時代にかけて、この地域までは鉄がある程度流通する圏内にあります。そこの地に、北からそれを求めてやってくる人たちがいて、具体的な遺跡名をあげると、巻町にあった南赤坂遺跡などはそういう遺跡の１つです。

この結節点というのが、新潟を考える場合の大変重要なキーワードです。私はおろかにも、学生時代に関西で考古学を勉強して新潟に戻ってくるときに、関西で勉強したことなど何の役にも立たないとか、新潟は別世界だとかといった先入観をもって帰ってきました。ところが帰ってきてみたら全然違う。私は何を６年間大学で勉強したのかと思うくらい、いろんなことがつながりました。そのような集大成の遺跡として、私はこの古津八幡山遺跡、八幡山古墳と出会ったような気がいたします。弥生・古墳時代移行期の越後平野を象徴する遺跡です。

最後にもう１つ言っておきたいのは、新津というのは日本でも有数の鉄道都市です。私は小学校２年のとき、昭和 37 年、特急とき号が初めて東京まで走ったときに、新潟から東京まで乗車して行きました。新潟を出てすぐ、最初に新津駅に停まるんです。そのときの停車駅は東京までに新津と長岡と高崎だけです。その３つの駅になぜ新津が入るかが最初理解できませんでした。でもそのとき見た汽車の転車台とか、駅の活気ある姿を見ました。新津は信越線、羽越線、磐越西線がまさに交わるハブとなる十字路の駅で、いろんな文化が集約される地です。鉄道は近代のことですけれども、古墳時代、さかのぼって弥生時代も同じような文化や歴史の十字路であることを物語るわけです。小学校２年のときの新津駅の思い出は、弥生時代から古墳時代のこの古津八幡山遺跡の歴史とも結びついたということを最後に申し上げておきたいと思います。

今後さらに遺跡のさまざまな活用が進んで、多くの市民の方々に親しまれることを期待しまして、私のつたない話を終わりにしたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

【註】遺跡の名称は、2005 年、国の史跡に指定される際、遺跡所在地の大字の地名「古津」を冠して「古津八幡山遺跡」とされた。それまではたんに「八幡山遺跡」と呼ぶことが多く、報告書の書名も同様であった。なお、古墳の名称については、新潟大学考古学研究室による 1992 年の最初の報告書『古津八幡山古墳Ⅰ　1991 年測量調査報告』（新津市教育委員会）から、「古津八幡山古墳」とされていた。

弥生の丘展示館開館10th /新潟市新津美術館開館25th /古津八幡山遺跡発見35th 2023.2.5

新津の山に大きな遺跡と古墳があった

ー歴史を変えた古津八幡山遺跡ー

坂井秀弥（新潟市歴史博物館長）

史跡古津八幡山遺跡（2005年指定）
弥生高地性集落/古津八幡山古墳

©新潟市文化財センター

スライド1

1. 遺跡発掘と戦後日本の考古学
2. 新潟にもあった古墳とその前史
3. 古津八幡山遺跡の発見
4. 保存の声と確認調査の継続
5. さいごに－遺跡の意義

・1987年10月、初めてこの地に立ってから35年。思いもがけず見つかった県内最大の古墳と弥生集落は、多くの方々の理解と協力のもと保存され、2005年、国史跡に指定されました。
・いま遺跡は史跡公園となり、周辺の美術館や植物園などとともに、歴史・文化や自然豊かなゾーンとして、多くの市民の方々に親しまれています。
・新潟市・県を代表する重要な遺跡・文化財が、こうして幅広く活用されることは、かつては想像できませんでした。
・本日は、最初の遺跡発見に立ち会った者として当時を振り返り、遺跡の意義を考えるとともに、関係した多くの方々に感謝申し上げたいと思います。

スライド2

1. 遺跡発掘と戦後日本の考古学

弥生時代のクニの全貌
吉野ヶ里遺跡(特別史跡):1989年

考古学ブーム到来
高松塚古墳（特別史跡・国宝）:1972年発見

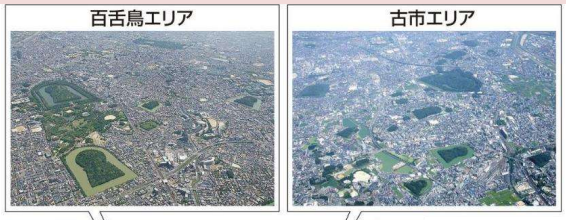
豊かな縄文文化
三内丸山遺跡(特別史跡):1994年

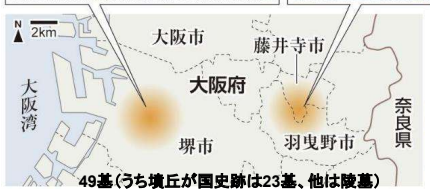
発掘調査と歴史の書き換え

スライド3

遺跡が世界遺産に！

百舌鳥･古市古墳群（2019.7登録）





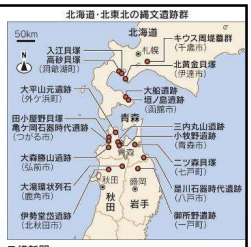
49基（うち墳丘が国史跡は23基、他は陵墓）

【遺産の評価】
広域の豪族連合政権による初期国家/墳形と規模の差異が被葬者の身分差を反映/日本固有の文化で、土木建造物の極めて優れた技術

スライド4

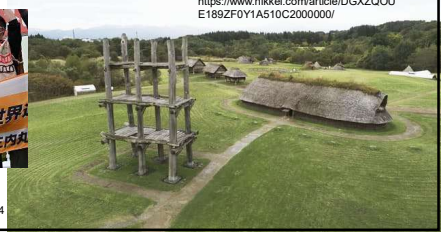
北海道･北東北を中心とした縄文遺跡群 2021年7月登録

北海道･青森県･岩手県･秋田県の17遺跡



【ユネスコ･イコモスの遺産評価】
・先史時代における農耕を伴わない定住社会および複雑な精神文化を示す
・定住社会の発展段階やさまざまな環境変化への適応を示している

日経新聞
https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE189ZF0Y1A510C2000000/



北海道新聞21.5.28 https://www.hokkaido-np.co.jp/article_photo/list?article_id=548974

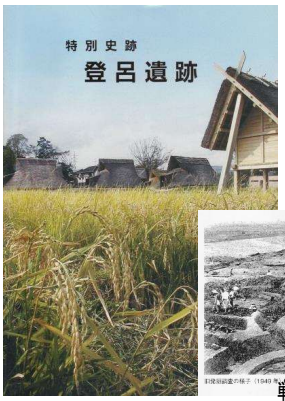
スライド5

戦後日本の文化財保護制度と遺跡

- 戦後日本では、考古学は大きく進展し、歴史学や自然科学分野の研究もあいまって、日本の歴史はかなり鮮明になってきた。考古学の発展は、何よりも、全国各地で、多くの遺跡が発掘調査され、膨大な成果が蓄積されてきたことによる。
- 文化財保護法により、土木工事で遺跡（埋蔵文化財）が影響を受ける場合は、事前に発掘調査を行う（年間約8000件）。発掘調査は基本的に行政が実施する。都道府県・市町村に考古学の文化財担当者がいる（現在約5500人）。
- 大半の発掘調査は土木工事に伴う調査であり、地域的な粗密の差はあるものの、全国各地で悉皆的な発掘調査が行われたことにより、地域と国の成り立ちが解明されてきた。新潟県も例外ではない。
- こうした遺跡の発掘調査と考古学の進展は、なぜうまれたのか？ ーその起点は、昭和20年（1945）の敗戦にあった。

スライド6

戦後の日本に夢と希望を与えた遺跡



登呂遺跡（静岡県）1947～49年

・敗戦で戦前教えられた歴史を失った日本
・学界総出で調査に取り組む
・弥生時代（約2000年前）の集落と水田が発見
・国民上げて夢と希望を見た

戦後の発掘調査

出土した農具

スライド7

日本考古学協会設立へ

登呂博物館の展示

スライド8

『土の中に日本があった―登呂遺跡から始まった発掘人生』（小学館二〇一四）

考古学者 大塚 初重さん

2022. 1. 27

7月21日、95歳で死去

戦後の日本考古学の「生き字引」だった大塚初重さん。取材では弥生時代の祭りの道具とされる銅鐸（どうたく）のレプリカを持ち出し、撮影に応じてくれた＝2015年1月、千葉県成田市

古代の追究 戦争原点

登呂遺跡（静岡市）の発掘に始まる輝かしい研究者人生は、死と向き合った戦争が原点。「考古学は人間学」と説き、太古の炎後を追い続けた。

「片っ端から厳発とし、戦後70年の2015年、取材で考古学を志したきっかけを振り返ってもらうと、柔和な顔には似つかない言葉が飛び出した。

1945年、海軍の1等兵曹として18歳で中国・上海に向かう途中、船が魚雷攻撃を受けた。脱出するため、ワイヤロープにつかまった。小説「蜘蛛の糸」のように、助かるためには体にしがみつくと誰かを犠牲にせざるを得ないなかった。

「神風なんて文かなかい」。戦前の軍国主義への疑問が出発点となり、復員後に明治大で考古学の道に。「打倒、弥生時代の稲作を証明した登呂遺跡の調査に参加、自分の手で今、歴史を明らかにしている」。問かゆねると「人間学」と返ってきた。21年1月、遺跡を迎えたころ、時の興奮を伝えてくれた。

未盗掘の副葬品が国宝となった縄貫観音山古墳（群馬県尚崎市）や、鮮やかな彩色展開が目つかった板屋古墳（茨城県ひたちなか市）など、研究に名を残す発掘を何度も手がけ、日本考古学協会会長も務めた。その「万一」飾られ人間学の道具、柄とする学術で、長年続けた市民講座は常連がつくほど人気を集めた。

考古学とはどういう学問かゆねると「人間学」と返ってきた。21年1月、遺跡を迎えたころから始めた遺跡のスケッチの画集出版が最後の取材となった。この時も「考古学は遺跡から人を感じることができるかどうかが重要。ただ、これが難しい」と繰り返した。

遺跡を的確に捉えた線描と、古代の息吹を感じさせる温かみのある色彩。戦後の平和をかみしめつつ目指した人間学が、スケッチには残されている。

（共同通信・田中直同）

「新潟日報」（共同通信系）2022.9,27

スライド9

岩宿遺跡（群馬県） 1949年の発掘調査（1974年史跡指定）

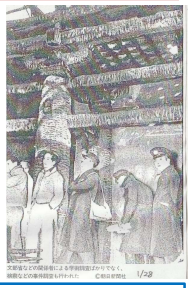
・それまで未確認であった旧石器が発見され、歴史は1万年以上にさかのぼった。

- 遺跡と考古学は国民に希望を与えその重要性が広く認識された。

スライド10

文化財保護法の成立（1950年）

- 1950年『文化財保護法』制定。
  1949年1/26　法隆寺金堂火災発生
- 戦前の国宝保存法（古社寺保存法〈1897年〉、史蹟名勝天然紀念物保存法（1919年）を継承、まとめる。
- 「埋蔵文化財」の規定（発掘届）誕生
  →登呂遺跡などの影響で全国的に遺跡の発掘が盛んになり、調査方法などに問題が生じたため、それを規制。

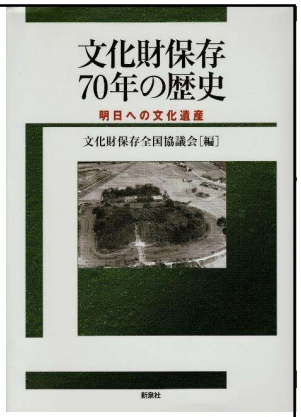


戦後、国民は、国や地域の成り立ちの真実を知りたいと願い、各地に埋もれた遺跡に真の歴史を求めた。国民の理解と協力に支えられて、これまで多くの発掘調査が行われてきた。

スライド11

市民運動で保存されたイタスケ古墳（大阪府堺市）1955年史跡指定

■遺跡保存と市民運動
・研究者だけではなく、わがまちの遺跡・文化財に対する住民の思いが保存の原動力
・1922年史跡指定の特別史跡平城宮跡は、建築史の関野貞が確認し、地元の植木職人、棚田嘉十郎が保護運動を展開
・よい意味での郷土意識が遺跡保存を支える



2017年

スライド12

2. 新潟にもあった古墳とその前史

鼉龍鏡
（新潟県指定文化財）

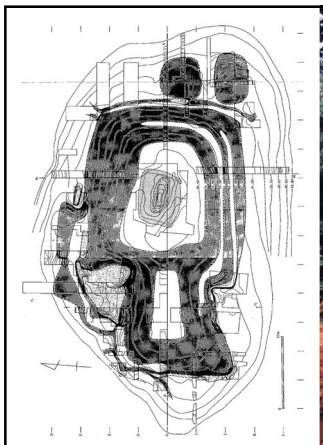
菖蒲塚古墳（国史跡・前方後円墳/西蒲区）

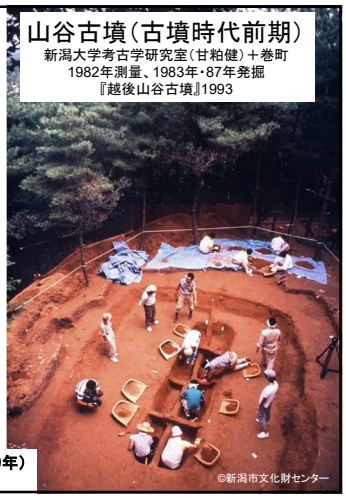
スライド13

1）山谷古墳の「発見」（旧巻町）

- 1981年11月25日：新潟県教育委員会による角田丘陵分布調査/東北電力鉄塔建設（高橋保氏・坂井）
- 山陰・北近畿でみられる弥生台状墓、古墳などの発見が期待された（指導：文化行政課金子拓男係長）
- 雨の中を踏査。午後薄暗くなりかけたとき、古墳を発見。きわめて端正な墳丘の形状であり、前方後方墳と判断できた。ほか1基（岩室・観音山古墳）
- 後日、巻町の藤田治雄氏が1959年に発見していたことが判明。当時は正しく評価されなかった。
- 新潟大学考古学研究室（甘粕健1977新大着任）・巻町教育委員会　（1982年測量）、1983年・87年発掘（『越後山谷古墳』1993）

スライド14



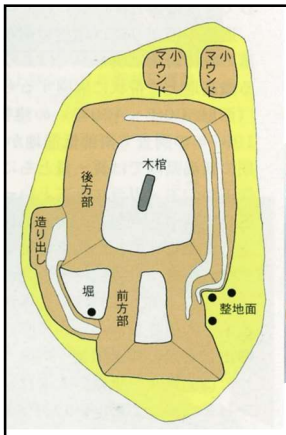


山谷古墳（古墳時代前期）
新潟大学考古学研究室（甘粕健）＋巻町
1982年測量、1983年・87年発掘
『越後山谷古墳』1993

1981年11月25日発見（じつは再発見1959年）
新潟に古墳はないとの先入観）

©新潟市文化財センター

スライド15



山谷古墳平面図
と出土土器

＊1983年三条市保内三王山古墳群の確認
84年測量、85・86年発掘（『保内三王山古墳群』1989）

●：供献土器出土位置

©新潟市

スライド16

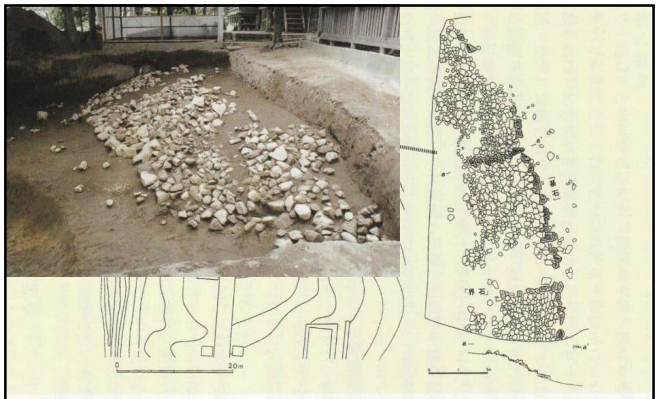
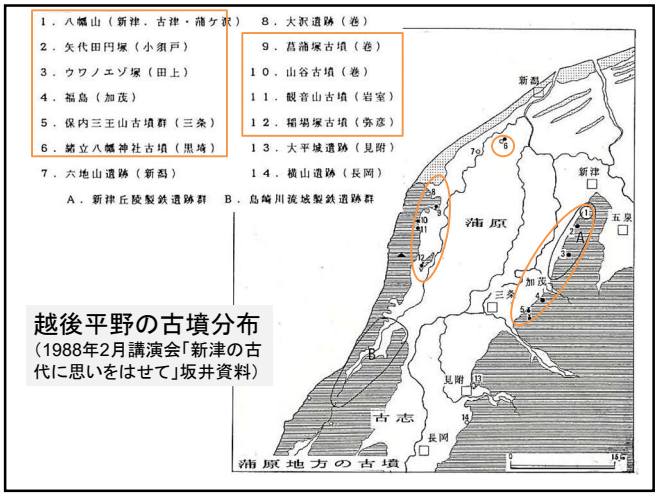


図29　緒立八幡宮古墳とその葺石
発掘調査の結果、直径約30メートルの円墳であることが明らかになった。墳丘表面には一定の規則に従って石が葺かれており、古墳を荘厳に際立たせるている。古墳の周辺地域には、葺石となる石材はなく、お

黒埼町教委・國學院大學1981発掘調査『黒埼町史』通史編　2000年

スライド17



越後平野の古墳分布
（1988年2月講演会「新津の古代に思いをはせて」坂井資料）

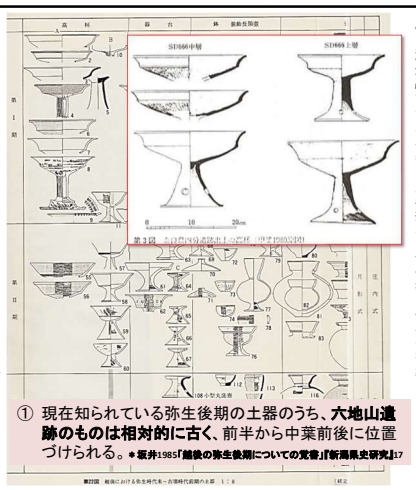
スライド18

2）弥生/古墳の土器編年

第Ⅰ期
畿内Ⅴ様式
末期
塚崎Ⅰ式

第Ⅱ期
庄内式
月影式

第Ⅲ期
布留（古）式
古府クルビ式



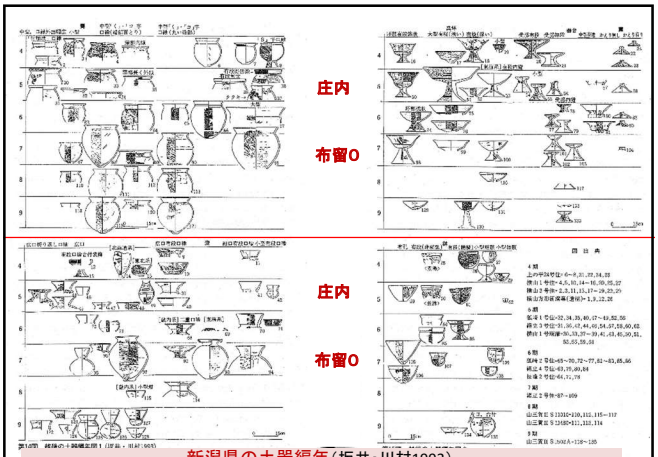
横山勝栄・坂井秀弥「内越遺跡出土土器の越後における編年的位置」『内越遺跡』一九八三　土器編年は金子拓男係長の指導

① 現在知られている弥生後期の土器のうち、**大地山遺跡のものは相対的に古く**、前半から中葉前後に位置づけられる。＊坂井1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17

スライド19

② 弥生後期後半に形成される**北陸地方の地域圏**のなかで、東北部を除く越後は能登・越中・佐渡とともに**北陸北東部**に位置し、古墳成立期まに至るまで、その地域差が継続する。
＊坂井1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17

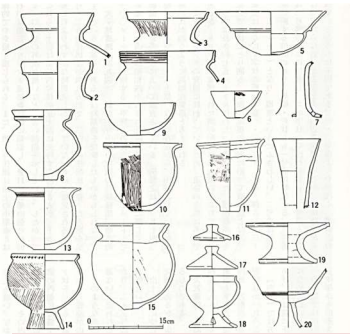
スライド20

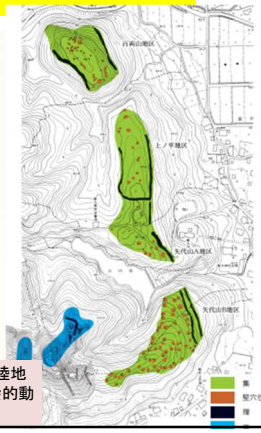


新潟県の土器編年（坂井・川村1993）
川村浩司氏が主導した日本考古学協会新潟大会は東日本の広域編年に大きく寄与

スライド21

3）高地性集落の存在





③ 越後でも**高地性集落**が存在し、同時期の北陸地方に共通し、畿内を中心とした西日本の社会的動乱が及んでいたことがうかがえる。坂井1985

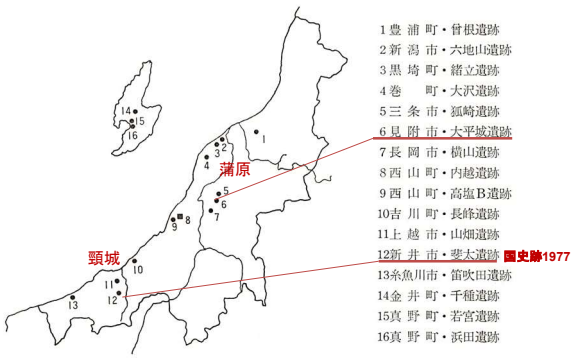
スライド22

環濠

スライド23

瀬戸内の高地性集落（香川県紫雲出山遺跡）

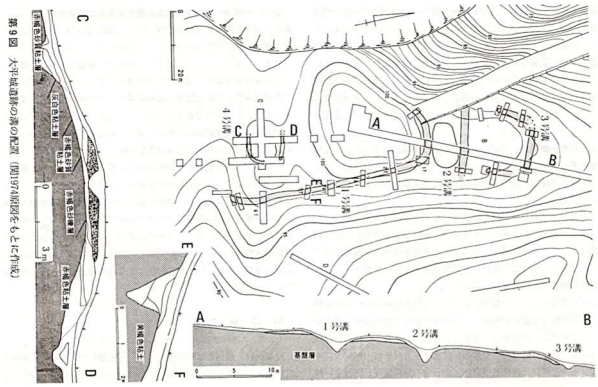
スライド24



第21図 越後における弥生時代終末～古墳時代前期の遺跡分布図

『内越遺跡』(1983.3)

スライド25



大平城跡 ＊中世の城跡として調査された

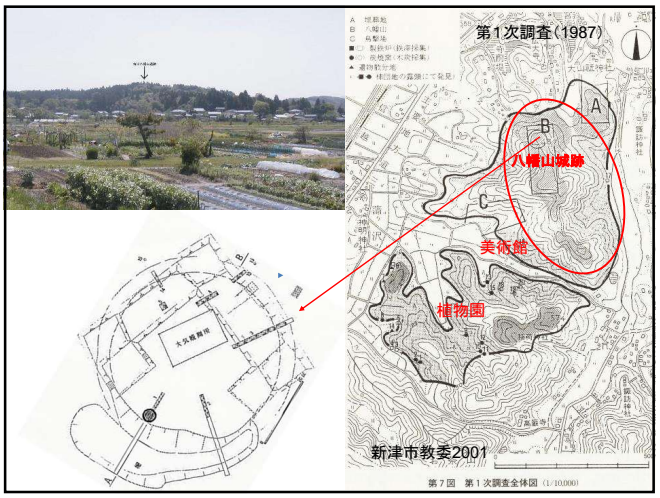
＊巻町大沢遺跡

スライド26

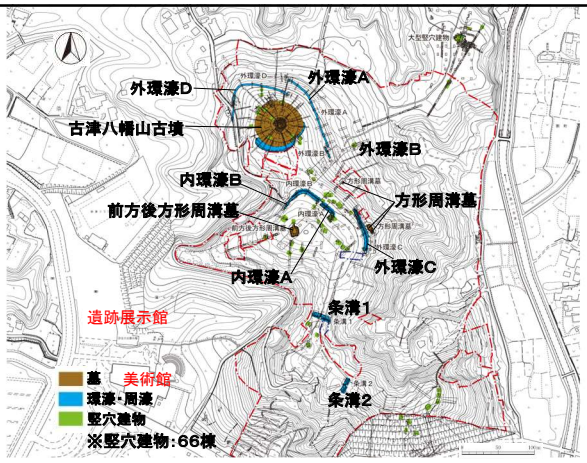
3. 古津八幡山遺跡の発見
（第1次調査）

- 1987年：磐越自動車道建設に伴う盛土土砂採取、および新津市総合運動公園建設（約45ha）の計画
- 確認されていた遺跡：鳥撃場遺跡（縄文）、埋葬地遺跡（縄文）、八幡山城跡（中世）、居村製鉄遺跡（古代）
- 87年9月28日～10月9日/埋蔵文化財の確認調査：主体は新津市教委、調査員は県文化行政課職員（戸根氏・坂井10/5~9ほか、寺崎氏から対象地の確認を十分行うよう指示される）
- 調査成果：大型円墳、大規模弥生集落、大規模古代製鉄遺跡等の確認

スライド27

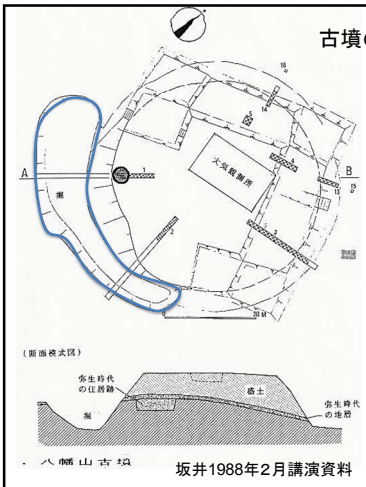


スライド28



古津八幡山遺跡遺構平面図

スライド29



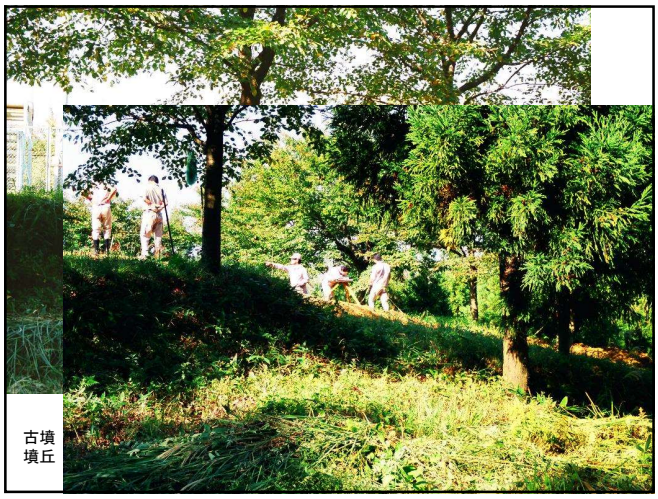
古墳の墳丘、トレンチ平板実測図

【坂井手帳メモ】
- 10/5：八幡山、大円墳か？
- 10/6：居村製鉄踏査
- 10/7：居村製鉄踏査
- 10/8：居村製鉄踏査
- 10/9：八幡山古墳実測

皮膚科受診

坂井1988年2月講演資料

スライド30



スライド31

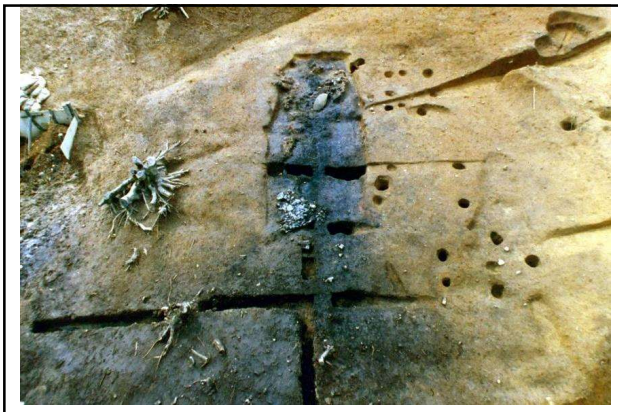
スライド32

スライド33

スライド34

スライド35

スライド36



居村遺跡E地点（8世紀）　　箱形炉

スライド37

スライド38

第1次調査報告

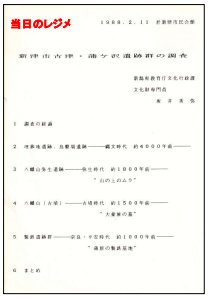
（新津市2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』引用）

- 八幡山城跡：堀と盛土の形状・構造から中世の山城とは考えられず、古墳時代の円墳とみるのが妥当と考えられる（仮称：八幡山古墳）。（略）直径55m以上の円墳とすれば県内最大である。⇒新潟大学1991年測量調査
- 古墳造営前には、この丘陵尾根上に弥生時代中期～後期の集落跡が存在する（仮称：八幡山遺跡）。遺跡の広がりは今回の調査では確認できなかったが、尾根のピークまで延びていたことは確認された。土器は東北地方南部に分布する天王山式土器で、県内では数少ない例である。なお、丘陵尾根上に立地することから、一般的な農村ではなく、特殊な性格をもつものと考えられる。
- 弥生時代の集落、古代の製鉄遺跡は分布・確認調査が不十分なので、さらに詳細な調査を要する。

スライド39

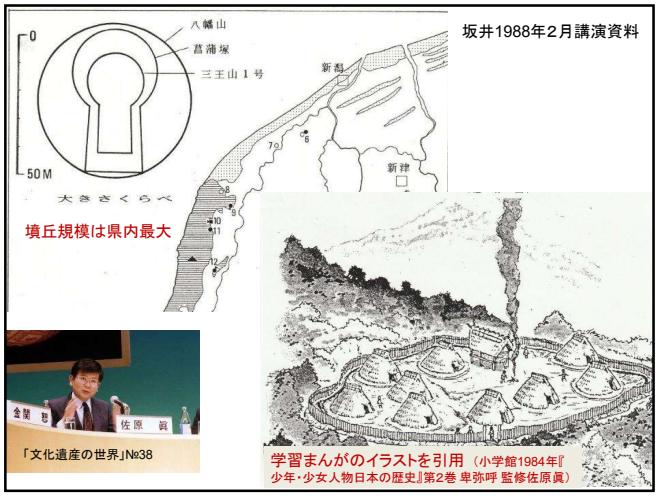
4．保存の声と確認調査の継続

1）講演会「新古今集」1988.2



講演会「新津の古代に思いをはせて」
1988年2月11日　新津青年会議所主催
「新古今集」（新津の古代と今を考える集い）
・坂井は県の職務として調査成果を報告

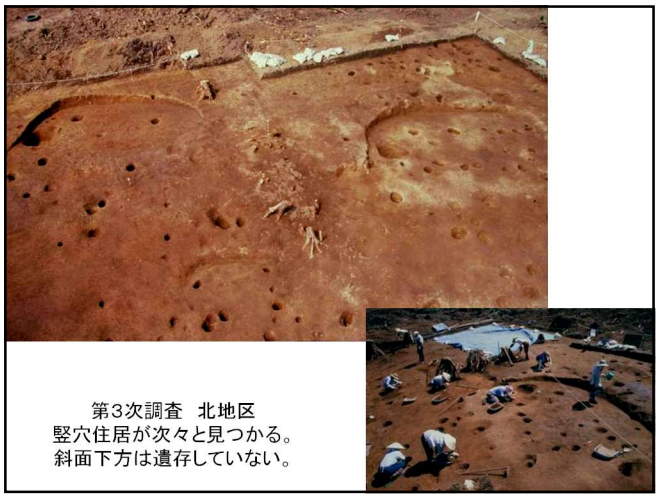
スライド40



スライド41

第3次調査　北地区　（1988.6～9：川上貞雄氏担当）
幅広いトレンチを斜面に設定。竪穴住居多数、環濠を確認

スライド42

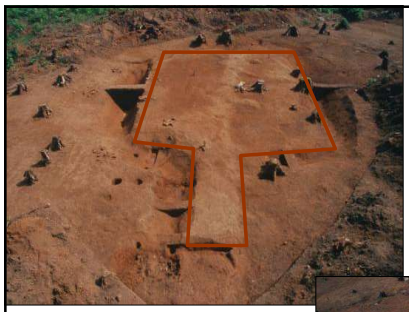


第3次調査　北地区
竪穴住居が次々と見つかる。
斜面下方は遺存していない。

スライド43

竪穴住居（復元整備後）

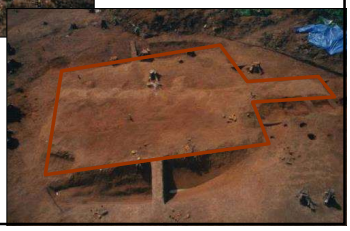
スライド44



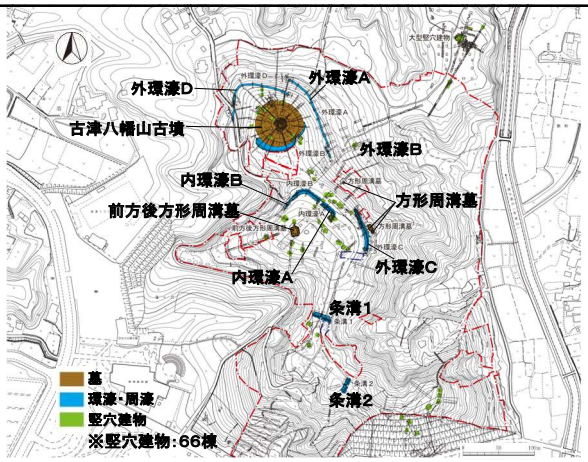
【第3次調査の結果】
・発掘面積：約3300㎡
・弥生時代竪穴住居16基
・小型竪穴遺構/円形炉跡3
・柱穴群
・大型の環濠4か所（二重）
・方形周溝墓あるいは古墳
＊遺跡は大規模になり、竪穴住居・環濠などの遺構も多くて、内容も豊富になった。重要性は増した。

全長13m

第3次調査　北地区
丘陵頂上部で「前方後方形周溝墓」を確認。相対的に新しく、被葬者は有力者とみられる。



スライド45



古津八幡山遺跡遺構平面図

スライド46

保存要望など

➢講演会

- 1988/9/4：佐原眞氏（奈良国立文化財研究所）　新津青年会議所主催
- 10/24：森浩一氏（同志社大学）　同志社大学校友会新潟支部主催

➢保存要望：新津市文化財調査審議会、日本考古学協会県内在住会員、日本考古学協会、新津郷土史研究会（署名8422名）、文化財保存全国協議会（署名1400名）など多数。1988年～90年8月まで。

スライド47

3）第7次調査（1990/7/23～8/10　県教委/坂井・新津市教委/渡辺）

南地区　全景（向こうは植物園予定地周辺）　弥彦山・角田山を望む

スライド48

南地区　環濠（条溝2）

スライド49

第7次調査　竪穴住居（斜面に造成されたものが多く、斜面下方は遺存しない）

スライド50

植物園予定地周辺の土取り工事

スライド51

製鉄関係遺構の確認（山林では可能性のある斜面を伐採し有無確認

スライド52

製鉄炉の調査

スライド53

11/20八幡林遺跡
「沼垂城」木簡出土

新津市教委2001

1990年8月8日文化庁河原純之主任調査官現地確認。遺跡保存とともに公園計画にも配慮しつつ、「東の吉野ケ里」と評した。

【県・市の保存合意】

1990年（平成2）11月29日合意文書

八幡山遺跡の主要部分を含む19.7haを現じょいう保存する。

①大入製鉄遺跡は保存する。

②土取りラインには傾斜をつけて可能な限り自然景観を保護する。

③八幡山古墳の重要性に鑑み、調査成果を速やかに報告書にまとめ、公表する。

④今後の取扱い

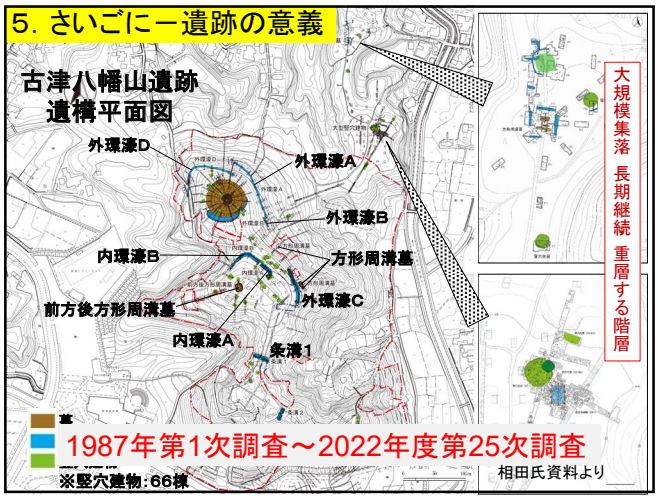
・県と市は当該遺跡が国指定史跡になるよう積極的な方策を講じる。

・市が進めている公園計画の実施にあたっては遺構を表示する等

⇒自治省「花と遺跡のふるさと公園」整備事業

⇒2005年史跡指定（国史跡の指定・整備は財政補助はあるが、基本的に市町村が担う。新津・新潟市の労は大きい。）

スライド54



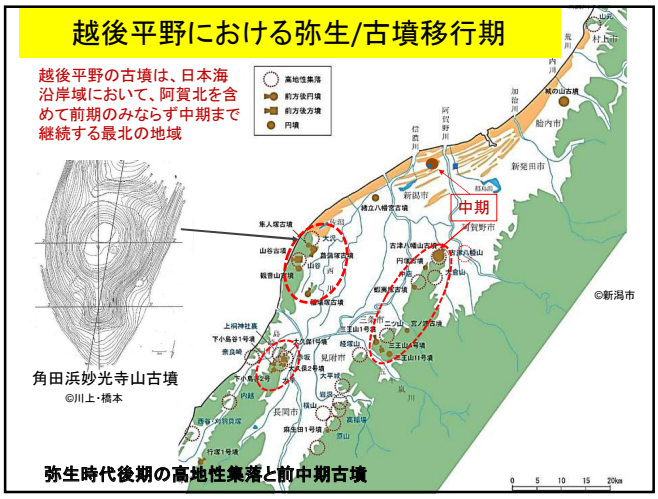
スライド55

古津八幡山遺跡の動向　相田氏資料より

時代	北陸南西部編年			古墳集成編年	新潟シンポジウム編年	古津八幡山遺跡 ※赤字は平成29年以降の調査で見つかった遺構			
						環濠	竪穴建物	掘立柱建物	墓
弥生時代中期			小松 専光寺 戸水B			―	―	―	―
弥生時代後期	1群	V－1群 V－2群 V－3群	猫橋式		1期				方形周溝墓
	2群	2－1群 2－2群	法仏式		2期	集落の出現 外環濠の掘削	SI802・SI821 SI0603 SI03S03 SI03S05 SI0602 SI728 SI03S06 SI03N03 大型竪穴建物（SI1） 竪穴住居（SI465）	掘立柱建物群？	SX1005 SX1006 SX1004 SZ743 （大型方形周溝墓） SZ822
弥生時代終末（古墳時代早期）		3群	月影式		3期	環濠が上層まで埋没 ⇒一部再掘削？ 内環濠掘削？			
		4群	白江式		4期				
		5群			5期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現			前方後方形周溝墓（SX03S14）？
		6群			6期				
古墳時代前期		7群	古新ウルピ式	1期	7期				
		8群	高畑式	2期	8期				
		9群		3期	9期				
		10群		4期	10期				1 古津八幡山古墳（古墳中期）

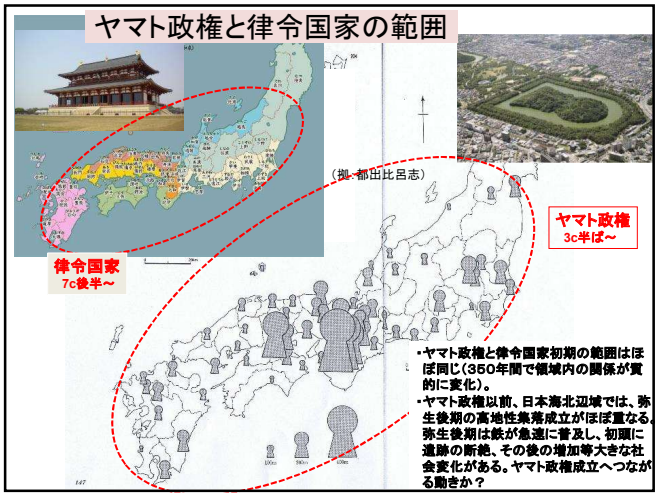
スライド56

スライド57



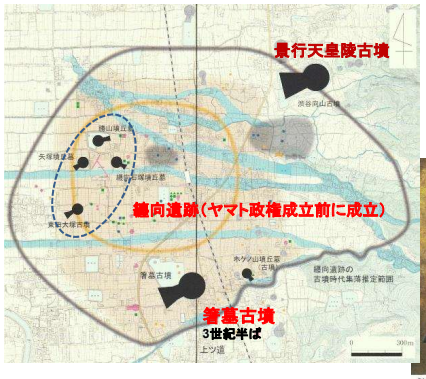
スライド58

スライド59



スライド60

ヤマト政権成立の地、大和盆地東南部
纒向遺跡・箸墓古墳/オオヤマト古墳群



箸墓古墳

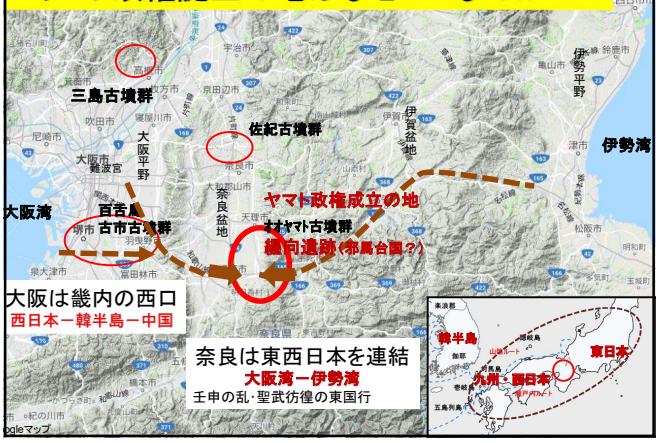
歴博模型

全長280m、後円部径160m

(拠:桜井市埋蔵文化財センター)

スライド61

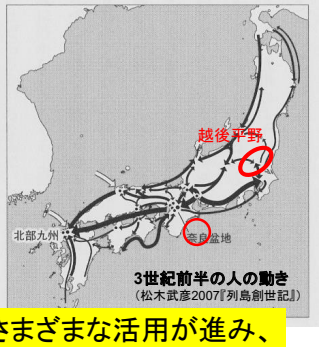
ヤマト政権誕生の地はなぜここなのか？



スライド62

3世紀前半(庄内式期)の人の動き
活発な土器・ヒトの移動

- 「庄内式」の時期は、全国的に各地の土器が活発に移動する(人びとの移動・交流が広域に活発化)。
- 新潟を含む北陸東部の土器は、高地性集落の終焉とともに、長野や群馬、福島・山形などに及ぶ。
- 新潟は東日本においては、北近畿・北陸、東海・中部高地、会津、北日本などとの複合的な結節点となる。
- 今後、さらに遺跡のさまざまな活用が進み、多くの市民に親しまれることを期待します！



3世紀前半の人の動き
(松木武彦2007『列島創世記』)

スライド63